SS基幹探究　探究基礎Ⅱ　国　語①

「おくのほそ道」

以下の文章は、松尾芭蕉の「おくのほそ道」の、越中・富山に関する部分である。

1　音読してみよう。

2　わからない言葉を辞書で調べながら、現代語訳してみよう。

3　発句の季語・季節を考えよう。

4　☆印の課題について考えよう。

那古(なご)の浦

黒部四十八ケ瀬とかや、数しらぬ川をわたりて、那古(なご)と云ふ浦に出(い)づ。担籠(たご)の藤浪(ふぢなみ)は、春ならずとも、初秋のあはれとふべきものをと、人に尋ぬれば、「是より五里、磯伝ひして、向かふの山陰に入り、蜑(あま)の苫(とま)ぶきかすかなれば、蘆(あし)の一夜(ひとよ)の宿かすものあるまじ」と云ひおどされて、加賀の国に入る。

わせの香や　分け入る右は　有磯海

卯の花山・倶利伽羅が谷をこえて、金沢は七月中(なか)の五日なり。

☆那古を取り上げた理由。

☆担籠の藤浪を話題にした理由。

☆人に何を尋ねたのか。

☆「蘆の一夜」とはどんな意味か。

☆芭蕉はこの後どう行動したのか。

参考

あゆの風　いたく吹くらし　奈呉の海人の　釣する小舟
漕ぎ隠る見ゆ　（『万葉集』巻十七 4017）

湊風　寒く吹くらし　奈呉の江に　妻呼び交し　鶴さはに
鳴く　（同 4018）

天平二十年春正月二十九日　大伴宿禰家持

天平二十年春三月二十三日左大臣橘家之使者造酒司令史田辺福麿饗于守大伴宿祢家持館、爰作新歌墺并便古詠各述心緒　田辺史福麿

奈呉の海に　舟しまし貸せ　沖に出でて　波立ち来やと
見て帰り来む　（同　巻十八 4032）

十二日遊覧布勢水海船泊於田祜湾望見藤花各述懐作歌　次官内蔵忌寸縄麿

多祜の浦の　底さへにほふ　藤波を　かざし行かむ　見ぬ
人のため　（『万葉集』巻十九 4200）

判官久米朝臣広縄

いささかに　思ひて来しを　多祜の浦に　咲ける藤見て
一夜経ぬべし　（同 4201）

夏雑歌

かくばかり　雨の降らくに　ほととぎす　卯の花山に　なほ
か鳴くらむ　（『万葉集』巻十 4008）

☆どんな情景や内容が詠まれているか。